

太平洋戦争とセレベス島、父の足跡を追う！

ホテルの九階からマカッサルの港を眺めていた。

昭和一九年一月二二日、父は此処マカッサルに日本陸軍の通信兵として上陸した港だった。

穏やかな海に何隻もの船が港の外で停泊し、荷物の積み下ろしを待っているようだ。

突然、ホテルの部屋の電話機が「プル・プルー プル・プルー」と鳴り出した。私は受話器を取り「もしもし」と言っていた。その時、ここが日本では無いことに気が付いた。

電話はフロントからの女性で、「あなたを訪ねロビーで男性が待っている」と云っているようだった。

私は慌てて、下に降りロビーを見渡すと、50歳代の男性が私に近寄って来た。

「こんにちは、稲葉さんですか？私はサリーです」  
流ちょうな日本語で私に話しかけてきた。

日本人にも見えなくはないのだが、肌の色が少し褐色な事が違っていた。

昔テレビ番組で「怪傑ハリマオ」を放送していた。そこに登場するハリマオによく似ていた。しかし、あの俳優は日本人だったが、サリーの身のこなしがハリマオに似ていた。

この島は戦前までセレベス島と呼ばれていたが現在はスラウエシ島と呼ばれている。ここに来る前に、私は北スラウエシ日本人会にメールを出していた。そこからマカッサル領事事務所に転送されたメールは、南スラウエシ日本人会の吉川さんが、私の旅行目的を知ることになっていく。

当初、私一人で父親が終戦を向えたスリリ陸軍病院を訪れようと考えていた。吉川さんはその行動を危ぶみ、ガイドと車を手配してくれた。

ガイドのサリーは何度かスリリ周辺やピンラン飛行場を訪れていた。

しかし、飛行場辺りの地理は、ガイドもハッキリ分らないと云っていた。

トヨタの車に運転手とサリーそして私が乗り、アストン・マカッサルホテルを朝、九時に出発した。

「私は富山県で温泉を掘るボーリングの仕事をしていました」

彼の日本語の会話から想像するに、何年も日本に滞在していたようだ。

ガイドは車窓から見える農村のことから島に住む人種などを説明してくれた。

「私はマカッサル人ですが、もう少し北へ行った。パレパレの町は、また違う人種が住んでいます。そして言葉も違います。若い人は今、学校へ行きインドネシア語を話しますが、学校に行っていないお年寄りは話せません」

運転手はマカッサル人では無く、他の言葉も分かるらしい、ガイドは運転手が別の言葉の通訳を介して分かる事もあると云っていた。

マカッサルの町から北へ150キロほど行ったパレパルの町で既に言葉が違う、私の郡上弁英語が使えるはずもなかった。ましてや私の聞きたいことは80年前の日本軍の事である。地元の高齢者でも記憶が曖昧で有った。

「ここら辺りは殆ど稲作をやっています。一年で二回米を取っています。三回とる処もあります。」

「えっ！ 三回も」

「はい、以前は雨が降るシーズンに田植えをしていたのですが、ダムが出来て灌漑用水が引いてある場所は、いつでも田植えをすることが出来ます」





ガイドが面白いことを話してくれた。百姓が専門で無くても、家に保存してある米が少なくなつたころ田植えをして、米を自給していると話してくれた。ほぼ赤道直下のこの辺りでは作物は何でも取れるようだと思つたが、そのことが出来ないところが日本軍の捕虜収容所がある処だと、後から分かつた。

インドネシアの国は赤道から南に幾つかの島から成り立っている、その中にセレベス島と呼ばれた、スラウエシ島がある、日本本土の八〇%程で島と呼ぶには大きい。200万人程が住んでいるが、ガイドの話では多数の言語があると云う。

父は昭和十九年十一月にマカッサルの港に入っている。そこから陸軍の司令部が有つたであろう。ピンランの町へ向かつたと思われる。時の戦況は決定的な状態に陥り、父は日本軍の南方支援に向かう護送船団の一隻に乗り組み台湾、フィリピンを南下してジャカルタへ入っている。途中、米軍の潜水艦の放つ魚雷に命中して船団の多くの船が轟沈ごうちんまたは沈没してゆく話を何回も聞いている。

米軍の潜水艦からの魚雷を避けるため船団はジグザグ航行で進み、突然全艦隊、一斉に船主の方向を変えて進み、敵の潜水艦の目を欺あそむくのだと云っていた。常に船団の片側に島を見て、その方向からの魚雷の攻撃を回避する戦術を取つた。しかし、真夜中に突然船団の中の一隻に、魚雷が命中すると、なんとも綺麗な火柱が一本上がり船が轟沈してゆくのだと云っていた。船団はその沈みゆく船に手を差し伸べることも出来ず、必死で

残りの船は逃げて来たと言っていた。

南方の日本軍に弾薬や物資そして兵隊を送り届ける貨物船、それを米国の潜水艦の魚雷から守る為、駆逐艦などで船団を取り囲んでいた。

この話を岐阜女子大学 元学長 木田宏氏（元文部事務次官）の「木田宏オーラルヒストリー」の中で全く同じ話をしておられる。

木田氏もおそらく私の父と同じ船団の中の一隻に乗船していたと思う。

その時の様子を、木田氏は「まったく申し訳ないのだが、一本の綺麗な火柱が静かな海の中で突然上がって来るのだ」と。この木田宏オーラルヒストリーが伝える話と、私の父の話す言葉は全く同じに聞こえた。

船団は八月三日マニラ港出帆

八月一七日 昭南港上陸（シンガポール）

九月七日 昭南港出帆

九月一〇日 瓜哇島「ジャカルタ」港上陸

九月一三日 「ジャカルタ」出発 鉄道？

九月一四日 瓜哇島「スラバヤ」着

十一月一八日 「スラバヤ」港出帆

十一月二二日 「セレベス島 マカッサル」上陸

私の父が乗船する船団が南シナ海を通る時には、既にアメリカの潜水艦が多かった状況で、その後、昭和一九年十月、戦艦大和はそのレイテ沖海戦で米軍と対戦している。白鳥町で理容院を開業していた、幸太郎さんはその時、戦艦大和に乗船しており、その時の話を私は聞いている。

「三日三晩飲まず食わずで、撃って撃って撃ちまくった、敵も味方も関係なかった」と

また、幸太郎さんは私に面白いことを言った。

大和が呉港に帰って来た時、幸太郎さんは上官に大和から降りる願いを出して受理されている。

「もう！日本は負けたと思つて大和から降りることにした。上官はそうか！と言つて黙つておつた」

戦後、幸太郎さんは戦友会に参加した時、その時の上官がそこに居り、お互いに手を取り合つて「よかつたなあ」と話したと云う。

幸太郎さんは、「軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」を、「軍人は要領を本文とすべし」と変えて私に話してくれた。

「この辺りは漁師の家が多いです。屋根に魚の尻尾があるでしょ」よく見ると、屋根の棟に付けてある。日本では鬼瓦が載せてある所に、魚の尻尾を掛け合わせて表示している。



ガイドはパレパレの近くの海に私を案内してくれた。広い海なのだが日本の瀬戸内海のような静かな波が打ち寄せていた。砂浜には小魚が戸板に並べて干してある。よく見ると、海岸から少し離れた所に竹で櫓を造り漁師がそこから回遊してくる魚を網で取るとガイドは話してくれた。大きな魚を見ることは出来なかつたが、日本の煮干しの様に天日で魚を干しているようだった。

ガイドは浜の近くの民家に案内してくれた。5・6人の男女が雑談をしている所へ

「こんにちは」私が話したら、みんなから、「こんにちは、ありがとう」など日本語が帰つて来た



三十代から四十代の人たちは昔、学校で日本語を習ったが忘れてしまったと、云っているようだった。

私は、当時、日本陸軍の態度が悪く、現地では歓迎されないのではと思っていたが、思ったのと違う歓迎で嬉しかった。

当時の日本陸軍は原住民の作物などの略奪を軍命令で禁止しており、長期駐留は自給自足体制をとっていた。

この辺りの家では、漁師の娘が農家へ嫁いだりすることは出来ないらしい、家の職業が同じでなければ駄目らしい。そして、結納金のような結婚資金が必要で、若い男は必死に貯金をしていると言った。私は、「反対されても結婚したいときはどうするのか」と聞いたら「女を連れて逃げる」と云っていた。日本と同じらしい。

「この辺りは昼の暑いときは仕事を休み、少し涼しくなってから仕事を始めます」とガイドは話した。

海は穏やかで波の音も聞こえては来なかった。

米軍が制空権を取り終戦が近くなつたころ、父達は敵兵の目を盗み夜間にジャングルの中から抜け出して、塩を取るため海岸の砂浜に出て来たと話していた。



「服を脱ぎ、海の中へ首までゆつくり浸かっていると。体の中

へ塩分が吸収されて元気がじわじわと出てくるのがハッキリと分かった」と云っていた。  
残念ながら、塩をどのように海水から取り、ジャングルへ持ち帰って行ったかは聞いていない。



父は、昭和19年11月22日、「セレベス島」「マカツサル」上陸している。

日記では昭和19年11月1日～昭和20年1月31日間、第二次濠北作戦参加

昭和20年6月25日、第4航測隊専属。

2月1日～8月14日間、反攻激撃、碎作戦参加と書いている。

父は昭和14年ごろから揚子江周辺で日中戦争を経験し、満州辺りまで転戦している。その後、陸軍航空通信学校招集下士官として日本での通信学校の後、セレベス島へ派遣されている。当時、上空の飛行機の位置情報は現在のような、GPS位置情報システムも、地上にリーダーアンテナが有るわけでもない。当時の飛行機に対気速度計、姿勢指示計、高度計、昇降計、方

位計、旋回計まであったらどうか？一機の飛行機の位置情報を調べるには、その飛行機がまず電波を発信する、その信号を地上の別々の離れた所から、受信することで、飛行機の仰角、方位を図る、2か所の情報から、飛行機の高度と方位を地図上に書き出してその情報を飛行機に知らせる方法だったらいい。つまり、三角測量である。

また、私が直接、当時の飛行機乗りに確認したところ、自分が乗った飛行機の位置情報を調べるには、雲の下まで機首を降下して行き、地上の地形から位置を確認して、また雲の上まで舞い戻ったと話していた。

私たちは、また、車で北へ進みパレパレの町に着いた。ここは、大きな湾が入り込んでいる良港で、古くから海の交通で栄えていた。父も引揚船で日本へは、この港から帰っている。

ガイドは「ここで食事をして行きましょう」と、町の中央にあ





#### 従業員の内食市内パレパレ

一つ上だったが、かきやく 饗饌として店を切り廻していた。私に古い写真を持ってきて見せてくれた、昔のこの店だと気が付いたのは後からだった。

店の主人からガイドが聞くには、向かいに建っている建物は当時のヤマトホテルで、建物の前だけが残り、内部に入ることは出来ないらしい。

当時、日本人が多くこの限界を行き来していたのだろう。しかし、今は日本人の姿を見ることは無い。その代りに、行き交う車は、ほとんど日本車で、オートバイもよく見ると日本メーカーの名前が後ろに書いてある。バイクの事をホンダと言うらしい。イスラム教では、女性は外出の時に肌を露出せずに隠す服装で、ヘジヤブをまといオートバイに乗っている。これが、また、凄い、片手でハンドルのアクセルを握り、片手にスマホを持ち「ビーン」と私たちの車を追い越して行く。二人乗りのバイクは当たり前で、よく見ると中に子供が挟まれ顔だけが見えている。バスや電車の公共交通機関が少ないのは、バイクが便利なのかもしれない。

信号機の無い交差点等では、先に車の鼻を入れたものに優先権があるようである、道路での追い越しは右側でも左側からでも追い越してくる、前に車が居れば追い越すことになっているらしい、これはバイクでも車でも同じで、その時、必ずクラクションを鳴らすのが合図のようである。

昼食後、私たちは。パレ。パレ市内から三〇キロ離れたスリリバ  
ラット温泉へ行ってみることにした。  
父の残した記録ではスリリ陸軍病院に昭和二一年一月一六日  
からアメーバ赤痢のため入院していたと記録がある。当時の日  
本陸軍病院はわざわざ温泉の湧き出るところに病院を持って



旧ヤマトホテル パラパレ市内



店主が見せてくれた昔の写真

来たのだろう。それ以前に病院が在ったとは考えにくい。

スリリには現在、地元の人が週末に通うプールや野外バーベキューなどの施設がある。施設の横に温泉が湧き出ているが、地元の人は温泉に入る風習はない。水を張った田んぼの様に見えるが、手を入れてみると40度以上はあり、もしかすると水を足

さなければ入浴出来ないかもしれない。この施設には週末に人が集まり賑わうらしい。



#### 池に温泉が湧いている

施設の反対側に在る、家の住民に聞いた、昔のことは全く分からないと云っていた。ただ、家の横にヤシの木が何本か有り、周りを竹で取り囲んで垣根を設け闘鶏を飼っていた、その場所に赤いレンガブロックが無造作に積んであり、昔の建物のものであったと主は話した。私はそのレンガの一個が欲しいと話したら、その主が棒切れを取り出して庭の片隅のレンガを掘り出して私に渡してくれた。土の付いたレンガの土を取り除いて見ると、赤みを帯びた焼きレンガだった。少し重たいが主にお礼をいって日本へ持参した。

#### スリリバラスト温泉

スリリ陸軍病院とは、南方第十五陸軍病院といていたらしい。

この地方では闘鶏が盛んらしく、庭の中では、三羽の鶏が足に紐を括られて、それぞれが距離を置いて、私たちに鋭

い目を向けていた。試合では蹴り合いの威力を増すため、蹴爪に鋼鉄製のナイフを装着させて戦わせる。負けた鶏は、ほとん



ど致命傷を負って死亡する激しい競技らしい。



記録では、昭和21年1月16日「スリリ」陸軍病院に入院している。終戦後である。

父はマラリヤで体を悪くしたと思っていたが、父の手帳にはア  
メーバ性公病と書いて有る。

多くの戦友がこの病気で亡くなって行ったと話していた。「食  
べる物もなく、ヤシの実が落ちてくるのをジッと待ち、ヤシの  
実が落ちてきたら、其処まで這<sup>は</sup>って行き実を探して持ち帰る。

しかし、誰かが持つて行った事も知らず、他の傷病兵は辺りを  
這いずり回りながら探し続けていた」と、父は何度か話をして  
いた。

「栄養不足で体力が落ちてくると若い兵隊から亡くなって行  
く」とも話した。体が若いと新陳代謝が活発でエネルギーの吸



収が必要だったのだろう！

また、父も体力も無くなり寝込んでいる時、「自分の後ろに誰が寝ているのかも分からず、寝返りを打つ体力も無かった」と話していた。ところが、私の姉は父から、聞いていたのだが、「ストレプトマイシンを討ったら段々と元気が出てきた」と話していたと言っていたらしい。

この事が事実だとしたら、日本に帰る前に、セレベス島の捕虜生活の中で進駐軍のアメリカ軍かオーストラリア軍が打たれていた事になる。

父は終戦の昭和二〇年八月から十二月までは、体も元気で捕虜生活の事を話してくれたことが有った。

オーストラリア兵の監視の中、旧日本軍の大砲の爆弾を海に運び、海中に放棄する仕事をしていたと話した。弾薬の重みでトラックのタイヤのスプリング板の湾曲が無くなり、スプリング板同士が張り付いて伸びてしまったらしい。その様子を、父はスプリング、キツと和製英語でオーストラリア兵に説明をした事を私に話してくれた。



「セレベス戦記 奥村 明」の書籍ではセレベス島のマリ

ン捕虜収容所辺りではオーストラリア兵ではなく、備兵よっへいの

ンボン兵だったと書いてある。父がアンボン兵に英語を使ったと私に話すだろうか？オーストラリア兵は確かにいたのだろうと思う。そしてストレプトマイシン」の話も、謎が多く、このスリリ陸軍病院に進駐軍の誰が持って来たのだろうか？



スリリから西へ5キロほど離れた所にピンランの名の付く集落が有る。反対に東へ5キロほど行くとマリンプンがある。そこにピンラン飛行場が有

ったと云われている。そこは死熱の草原マリンプンと言われ、第一次世界大戦の時、『死の草原』と呼ばれ、マリンプンは、第一次大戦中のジャワ移民及びドイツ軍捕虜がほとんど死に絶えたという、いわくつきの「地の果て」なのだそうである。確かにその場所だけ、密林が少なく、耕作地も少ない、グールマップで見てもハツキリと草木が少ない。

ピンラン飛行場は日本軍が作ったのか、その以前に有ったのかは分からない。しかし、日本軍が飛行場にするのには、最適地だったようだ、遠くまで見渡す事が出来き、障害物の山もない。ピンラン飛行場は、豪北作戦中に日本軍が使用した飛行場の一つと言われる。

終戦後、マリンプン捕虜収容所には、南セレベスに居た軍人、軍属、一般人2万人の多くはこの収容所に連れられてきたらしい。ここで、連合軍からは自給自足の生活をできるようにいわれていた。スリリ陸軍病院とピンラン飛行場は六キロ程離れているが、当時は隣だったのだ



ろう。

スリリに温泉が有ったことは資料には無い、「セレベス戦記」奥村明氏の本にも書いてない。しかし、現実には温泉が湧いている。ガイドのサリーさんは日本で温泉のボーリングの仕事をしていた。彼は専門家である、彼が云うには「何故ここに温泉が湧いているのか分からない」と、



近くに火山があるのなら話は別だが、火山がない。北スラウエシには火山が有り地震もあるとガイドは話していたが、南スラウエシは地震も無いと話していた。このマリンプンから北東へ五〇キロほどの所にラティモジョン山 標高は3,478メートルがあるが、火山の記録はない。グーグルマップで探すと、現在でもピンラン飛行場を航空写真で見ることが出来る。

当時の飛行場の滑走路がそのまま浮き出てくる。畑と原野に滑走路の直線が浮き出ている。おそらくこれは、未発表かもしれない。まだ、恐ろしい事にその滑走路上には米軍が落とした爆弾の残りが残っているのである。滑走路をハチの巣状態で絨毯爆撃したことが現在でも、グーグルマップで確認できる。

ピンラン飛行場らしき所へ行ってみると、インドネシア軍の一人が常駐していた。彼に話を聞くと、今後この辺りの開発を進めて現在は軽飛行機が飛んでいるが、滑走路も拡張するといっていた。

私は、「グーグルマップで確認できる穴は何か」と聞いたら、おそらく、爆弾の穴だといっていた。

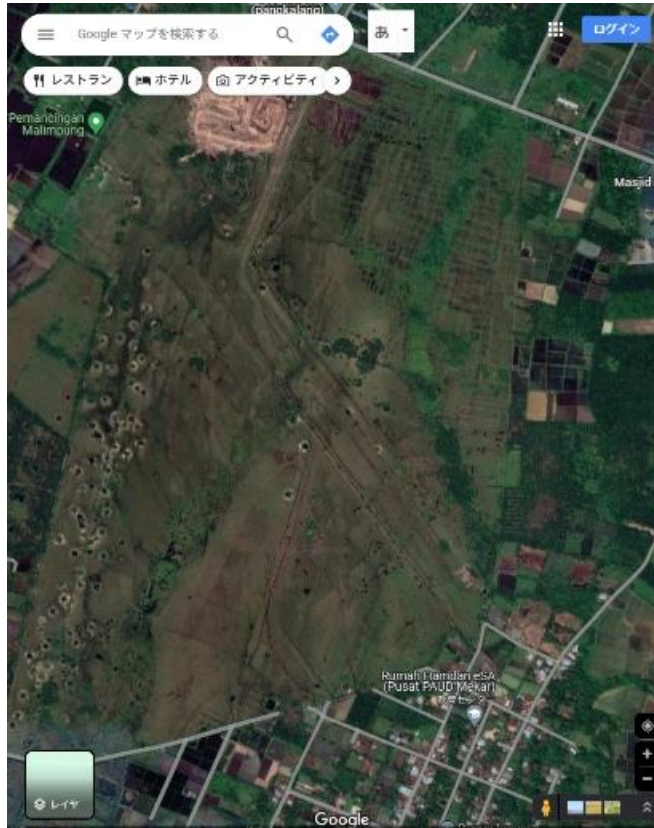
それ以外は当時の日本軍が残した建物や残骸は残っていないなかった。

そこから見渡す景色に高い山は無く、飛行機で飛び立てばすぐにあたりの地形の様子がよくわかると思えた。父は通信兵として、ここから飛び立つ飛行機を点になるまで見送っていた事だろう！

緯度、経度 3.73386, 119.74546

グーグルマップより





その日は、パレパレ市内のホテルにガイドと運転手の三人で宿泊した。ホテルの前に道路が通り、その向こうはパレパレの港だった。対岸には集落が見えている。大きな貨物船が停泊している。おそらくこの風景を日本に引き上げる「帰り船」に乗った多くの日本兵が無言で眺めていたと思う。

乗船前に兵隊の荷物の検査が行われ、アメリカ軍とオーストラリア軍の傭兵ようへいのアンボン兵が検査したとセレベス戦記 奥村

明氏の本に書いてある。

父の話では「検査する者は、兵隊の時計など、何もかも欲しがり、取ろうとしていた」アンボン兵に調べられる時、最初から「やるやる」といって、持ち物検査を早く終わらせたといっていた。おそらく、父はリュックの奥に貴重な物を忍ばせていたのだろうが、いくつかの貴重品も取られたと、私は思う。



その荷物の中で、今でも不思議な飛行機の置物が私の家に残っている。史料から調べると九六式陸上攻撃機に似ている。飛行機に使われていたジュラルミンの塊を取り出して、鑪やすりで削り置物の飛行機に作ってある。父がスリリ陸軍病院で作ったと聞いたが、詳しく聞いていない。おそらく、ピンラン飛行場とともに飛行機も爆撃され、残された飛行機の廃材から、プラモデル風に、父が作ったものと思う。



次の日の午後、マカッサルにある慰霊碑に行くことが出来た。

1945年8月17日、インドネシアが独立を宣言した。戦後、南スラウエシ州マカッサルで戦犯として処刑された日本兵34人がいた。

インドネシア人、故マハカウベさん宅の敷地内に慰霊碑を建立。現在でも遺志を継いだ家族が、参拝に訪れる日本人を暖かく迎え入れ、慰霊碑を守り続けている。慰霊碑に日本で私が作ったお米と水を供えて参拝し、お経を上げて来ました。

父は、セレベス島に来る前、陸軍航空通信学校に召集され本土にいた。しかし、その以前は中支派遣で揚子江近辺で幾つもの戦闘に参加している。私がテレビ映画「コンバット」を見ていた時、サンダース軍曹を見て、父は「戦いは、ドンパチと撃ち

合う事ではない、そこで飯盒はんごうで飯を炊き、食べて死体の傍そばで眠ることが戦いなんだ」と話していた。「下痢になっても敵前上陸ともなれば、一発で治ってしまう、人間の体はそんなものだ」と話していた。

しかし、その父も、セレベスの食糧不足とマラリアに体力を奪われたようだ。

父がセレベスから帰って来れたお蔭で、私が生まれ、このデジタル・アーカイブの報告が出来ることを感謝します。

ここに、北スラウエシ日本人会、南スラウエシ日本人会の吉川さん

在マカッサル領事事務所の皆さんの、ご指導とご鞭撻むちにお礼を申し上げます。

最後にガイドのサリーさんと運転手さんありがとう。

陸軍曹長 稲葉仁大 昭和四十五年 没 五十二歳

稲葉秀章 昭和二六年生まれ 七二歳

岐阜県郡上市白鳥町恩地五三五の三

上級デジタル・アーキビスト

☎ 09027779632



[h-inaba@gujo-tv.ne.jp](mailto:h-inaba@gujo-tv.ne.jp)



八十年の月日を経て、日本で再開した、スリリ陸軍病院で作った模型飛行機とそこの建物に使われていた赤レンガ



マカッサルの慰霊碑

氏名…稲葉仁大 大正六年九月二十一日生

本籍…岐阜県郡上郡牛道村陰地五百三十五番地の三

所管…岐阜飛行師団司令部

兵科…飛行兵（歩兵）

特業…無線・航測・機関銃・瓦斯

官等級…陸軍軍曹

身長…1米65糎

靴…10文7分

褒章…昭和15年4月29日、支那事変従軍北章換装

善行證書…昭和21年5月31日善行證書付奥

適任證書…昭和21年5月31日、大正11年勅令第431号に依る事務適任證明書付奥

官等級…

昭和13年4月11日、歩兵一等兵。

昭和14年1月10日、歩兵上等兵。

昭和14年12月1日、伍長勤務。

昭和15年1月1日、陸軍伍長。

昭和16年1月1日、陸軍軍曹。

昭和18年3月1日、陸軍曹長。

履歴…

昭和13年1月10日、現役兵として歩兵第68連隊補充隊第2機関銃小隊に入営。

昭和13年4月20日、陸支機密第55号により歩兵第60連隊機関銃中隊に隷属。

8月5日、中支派遣のため編成地出發。

8月〇日、大阪港出発。

8月11日、上海上陸。

8月16日、〇〇着。同月同日より〇〇付近警備。

昭和13年10月10日7日、蕪湖出発。

10月12日、湖北省大〇県遠源口付近上陸。

10月12日～13日間、遠源口付近上陸戦闘に参加。

10月14日～20日間、大王山―〇石港戦闘に参加。

10月21日～23日間、〇城―段家領に至る追撃戦に参加。

10月24日～26日間、葛房付近の戦闘に参加。

10月26日、武昌入城。

10月26日～11月7日間、武昌付近警備。

11月8日、武昌出発。

11月10日、蕪湖着。当日、原所〇隊に復帰。

11月12日～19日間、第15師団第二次〇〇領付近討伐参加。

11月29日より、蕪湖付近の警備。

昭和14年1月2日～1月7日間、〇〇付近戦闘に参加。

4月20日、蕪湖出発。同月同日、〇〇着。当日より同地付近警備。

4月6日～11日間、第15師団高淳付近討伐参加。

4月8日、新河〇付近の戦闘参加。

4月9日、狸〇橋付近の戦闘参加。

8月30日～9月2日間、第二次高淳作戦討伐参加。

10月25日～11月11日間、第15師団秋季討伐に参加。

11月20日～23日間、繁昌付近の討伐に参加。

12月14日～16日間、繁昌付近の討伐に参加。

昭和14年12月20日～昭和15年1月10日間、揚子江岸  
冬期作戦参加。

昭和14年12月20日～27日間、青陽作戦参加。

12月23日～24日間、大領付近の戦闘に参加。

12月25日、集家領付近の戦闘に参加。

昭和14年12月26日～昭和15年1月4日間、青陽県付近の作戦に参加。

12月30日～1月4日間、貴伐作戦に参加。

1月5日～10日間、虜州作戦に参加。

2月18日～28日間、○溪漂陽作戦の戦闘に参加。

2月18日～26日間、新河○付近の戦闘に参加。

7月1日、○等○。

追記、同年3月19日、支那派遣軍総司令部衛兵要員として派遣。

3月20日、支那派遣軍総司令部に専属。

4月28日、14年冬期作戦並び治安確保に参加。

昭和15年4月29日～12月31日、宜昌作戦並び秋季掃○作戦に総司令部に在りて参加。

昭和15年4月29日、旭七等。

昭和16年1月1日より7月7日、昭和16年前期作戦に総司令部に在りて参加。

昭和16年9月30日、給三等級。

昭和17年2月10日、昭和17年度第一次航空要員として第

4航空教育隊に専属を命ず。

1月22日、南京出発。同日上海着。

1月25日、上海出帆。

1月26日、長崎上陸。

2月1日、着隊。同日第2中隊付を命ず。

7月1日、陸達第42号により給二等級。

昭和18年1月20日、陸軍航空通信学校招集下士官（無線）として2月1日より概ね八ヶ月間分遣を命ず。

1月31日、出発。

2月1日、同校入校。

9月21日、陸軍航空通信学校修学終了。同日、満洲第2航測連隊専属。同日、水戸出発。

9月24日、下関港出帆。同日、金山港上陸。

9月25日、鮮満国境（安京）通過。

9月28日、〇〇浜第2航測連隊着。

10月1日、第二中隊編入。同日、〇〇浜出発。

10月2日、北安省龍旗第2中隊着。

10月25日〜30日間、〇号演習参加。

11月7日、〇〇浜移駐のため龍旗出発。

11月8日、〇〇浜着。

12月31日、二等級。同日、命管外居住。

昭和19年5月14日、「カ」号演習下令（於〇〇浜第2航測連隊）。

6月27日、南方専進のため〇〇浜出発。

6月29日、鮮満国境（安京）通過。

7月1日、釜山着。

7月3日、金山港出帆。同月同日、関東軍隷下を脱し第4航空軍司令官隷下に入る。

7月19日、比島「マニラ」港上陸。

5月14日〜7月19日間、専進準備〇に輸送作戦に参加。

8月3日、「マニラ」港出帆。

8月17日、昭南港上陸。



9月7日、昭南港出帆。

9月10日、瓜○島「ジャカルタ」港上陸。

9月13日、「ジャカルタ」出発。

9月14日、瓜○島「スラバヤ」着。

7月20日～31日間、第一次比島作戦参加。

11月18日「スラバヤ」港出帆。

11月22日、「セレベス島」「マカツサル」上陸。

昭和19年11月1日～昭和20年1月31日間、第二次濠北作戦参加。

昭和20年6月25日、第4航測隊専属。

2月1日～8月14日間、反攻激撃、碎作戦参加。

8月14日、終戦詔書発布。

11月15日、第32航空地区司令部専属。

11月30日、「セレベス」島「マリンプン」集結。

12月31日、給一等級。

昭和21年1月16日、「アメバ」赤痢のため「スリリ」陸軍病院に入院。

3月23日、アメーバ性赤痢公病。

6月3日、「セレベス」島「パレパレ」港出帆。

6月15日、和歌山県田辺港上陸。

6月16日、復員。

昭和45年2月3日 稲葉仁大 死去 52歳